

Q. 人工芝を敷いて、安全に、また、緑の景観を整えてみたが、幼子たちは、芝をめくってミミズやダンゴムシを探して遊んでいる。自然の土に勝る素材はないのでしょうか？

A. とても興味深く、また、示唆に富む質問です。人工芝を用いて安全性と景観の向上を図ることは、幼児の保育環境整備として合理的な選択のひとつです。しかし、実際の子どもたちの行動は、しばしばその意図を軽やかに超えてきます。

お尋ねの「自然の土に勝る素材はないのか？」という問いに対して、私は、以下のように考えます。

1. 自然の土のもつ素敵な魅力

幼児にとって「土」は単なる地面ではなく、五感を通じた世界との対話の場です。触覚・嗅覚・視覚：湿った土、乾いた土、草のにおい、ミミズのうごめき等、また、探究心の刺激として、虫探し、穴掘り、泥あそび等、さらに、変化の豊かさとして、天気や季節による変化（土のぬかるみ・乾燥・凍結など）、これは人工芝では再現しがたい「生きた教材」であり、身体的・認知的・情緒的な発達を支える重要な要素です。

2. 人工芝の利点と限界

人工芝の利点は、安全性（クッション性）、清潔さ・管理のしやすさ、一年中、緑を保てる景観です。その一方で、限界は、自然物とのインタラクションが乏しいこと、虫・土・植物のダイナミズムがないこと、夏には、熱がこもる（夏場の温度上昇）ことがあげられます。

結果として、子どもたちは人工芝の「下」に自然を求めているのです。これは、子どもたちが本能的に“生きた自然”を欲している証ともいえます。

3. 代替・補完的な提案

完全な人工素材が「自然の土に勝る」と言い切ることは難しいですが、次のような「折衷案」は考えられます。

ハイブリッド環境の構築

- ・一部を裸地（自然土）や土壌植生マットにして、自然観察や泥あそびのスペースを確保
- ・他の部分を人工芝などで整備して、安全性・管理性を両立

「土とのふれあいゾーン」の設定

- ・ミミズ・虫探し・植物育成ができるビオトープ的な空間の設置
- ・自然観察・発見あそびに特化した「感覚の庭」

人工素材でも「自然的な要素」を加える工夫

- ・竹チップやウッドチップ、バーク堆肥など、自然素材の緩衝材を使用
- ・匂いや手触り、虫との共存が可能になります。

要は、自然の土に「勝る」素材はないが、「補える」設計は可能と考えます。「勝る」というのは一義的には言い難いですが、土のもつ教育的・感覚的価値を理解し、それを部分的にでも残すことが、幼児教育の観点からは理にかなっています。